

社長の経営哲学の構築にお役立ちする

税理士法人 優和

経営者への活きた言葉

TEL 03-3455-6666
FAX 03-3455-7777

経営者への活きた言葉

社会貢献活動は企業の成長を支える 井上 礼之（ダイキン工業会長）

1. 最近、ESG（環境・社会・ガバナンス）やサステナビリティという言葉をよく耳にする。株価や時価総額といった成長性や財務の健全性だけではなく、様々な角度から企業を評価しようというものだ。グローバルゼーションやダイバシティが進み、価値観が多様化する中で、企業についても多様な観点から評価するというのは当然の流れだろう。ただ、こうした概念は別に目新しいものではなく、もともと企業経営の根幹を成すものだ。
2. 企業とは本来、「社会の公器」として利益を上げることを通じて、長期にわたって社会に貢献する組織である。利益は企業が社会の役に立つための「手段」であって、決して最終目的ではない。ダイキン工業の場合、良い製品をお客様に提供することで利益を生み出し、税金を納め、雇用を守り、また新しい製品を世の中に出すという事業サイクルを継続することが基本だ。
3. 一方で、本業の活動だけではできない社会に対する貢献や企業の役割もある。利益の許す範囲で、その企業らしい独自の貢献に継続して取り組むことが重要だ。単にお金を出すだけではない。CSR（企業の社会的責任）担当部署だけが関わればよいというものではない。トップから社員まで、同じ意識で自ら関わることが求められる。私は、企業が成長するためには、社員の納得感や一体感の醸成が原動力となると考えている。その意味で、社会貢献活動は、社会に喜んでいただけるだけでなく、企業が成長を続けるための風土づくりにもつながっている。

（参考：「日経ビジネス」2017年5月22日号）

経営者のための理念・哲学

正しく立派に生きる（ソクラテス）

荻野 弘之（上智大学教授）

1. ソクラテスは、市民たちに対して智慧と真理を大切にしよう強調し、「金儲けや世間の評判を気にしてばかりで本当によいのですか」「それが人生の目的でよいのですか」と、対話・問答を求めています。また、私たちが生きる上で、大切なのは「魂の世話」だと言っています。これは絶えず自らの魂、心をよりよくしていこうとする努力を怠ってはならないということです。
2. また、「吟味なき生は生きるに値しない」という言葉は、「いまの生き方でよいのか」と、絶えず自らの価値観や前提が正しいかどうか、吟味しながら生きることの大切さを教えてくれています。それから「よく生きること」つまり「正しく」「立派に」生きることこそ大切であり、「どのように生きるべきかは、最善と思われた結論の他は、自分の中の感情や欲望に従ってはならない」という言葉も残しています。これはカント哲学にもつながっていきます。

（参考：「致知」：2017年7月号）

ワンポイント経営アドバイス

目指すは「くるみん認定」基準

1. 厚生労働省が始めた、ブラック企業の実名公開制度もまた「入札から締め出すのに一役を買うことになる」（ある霞ヶ関官僚）という。地方公共団体の入札は、要件が満たしているかどうか自己申告だけで済まされることも少なくない。だが、「全国で悪事が暴かれたことで、自動的に入札の参加資格が消失する効果がある」（同）という。
2. そして、にわかには産業界でさきやかれ始めているのが、ホワイト企業の証しともいえる「くるみん認定」基準が、官公庁入札の参加資格の下地になるのではないという説である。「くるみん認定」とは、次世代育成支援対策推進法に基づく企業認定制度。一定の要件を満たすと、子育てサポート企業として認定され、税制優遇措置が受けられる。その認定要件には、フルタイム社員の残業時間が月平均 45 時間未満、かつ残業時間が月平均 60 時間以上の社員がゼロというルールだ。

（参考：「週刊ダイヤモンド」2017年5月27日号）

古典に学ぶ

レッキーの教え

（解説）レッキー（1838～1903・アイルランドの歴史家）が教えている、真実へ導く三つの動機。すなわち産業的、政治的、哲学的のうち、第一のものは武士道には全く欠けていた。第二のものも、封建制下の政治社会ではほとんど発展できなかった。その哲学的側面、そしてレッキーの言うように、その最高の側面においてこそ、正直が私たちの美德の目録中で上位に達したのだ。

（参考：佐藤全弘（訳）新渡戸稲造「武士道」：教文館）